

『あめりか物語』にみる文明批判*

— 「市俄古の二日」を中心に —

金青均**

目次

1. はじめに
 2. 「自由の国」としてのアメリカ
 3. アメリカ文明への批判
 4. 結び
-
-

1. はじめに

永井荷風（1879年〈明治12〉-1959年〈昭和34〉）は、明治期に西洋外遊の体験をもった作家の一人である。中村光夫が「荷風は明治時代を通じて、文学者になることをはっきり目的として、そのためにだけ外遊した唯一の人」¹⁾と述べているように、荷風の外遊は西洋の文学や芸術を学び取ろうとしたものであり、その外遊体験は彼の創作活動に大きな影響を与えた。

周知のとおり、荷風は自分のアメリカとフランスでの体験に基づいた作品集『あめりか物語』（1908年〈明治41〉8月）と『ふらんす物語』（1909年〈明治42〉3月）を出版した。両作品からは、彼の西洋文明観を読み取ることができる。本稿では、この中で『あめりか物語』を対象に、荷風のアメリカ認識と文明批判について考察したい。

* This work was supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government(MOEHRD). (KRF-2007-362-A00019)

** 高麗大学校 日本学研究センター 研究教授、日本近代文学専攻

1) 中村光夫『《評論》永井荷風』、筑摩書房、1979年、56頁。

『あめりか物語』は、発表以来、蒲原有明の「感じを現はす印象派的傾向の、よく現はれた新しい作品である」²⁾という言及、成瀬正勝の「その官能的な陶醉や社会の暗面描写などは、当時流行していた自然主義文学の次期的な展開と見られ」³⁾たという指摘に代表されるように、新しい傾向の小説として受け入れられた。

また『あめりか物語』は、人生に対する深い洞察がみられると高く評価されてきた。例えば、相馬御風は「小説の爲めに小説を書くと言ふやうな、所謂くさみがなくて、日記でも書くやうな調子で、平気で書いて居る。それで居て、読み終つて何とはなしに人生に対する深い瞑想に誘はれる」⁴⁾と述べた。石内徹は、この作品集を「異都憧憬の美学に向つて独自の道を模索した時期」⁵⁾の代表作と捉えた。網野義紘は「自由と解放を求める孤独な日本の青年の情熱が痛切な響きをもって流れている」と言った⁶⁾。このように『あめりか物語』は、外遊の体験をもつ荷風の文明意識があらわれた作品である、としばしば指摘されてきた。

ところで、『あめりか物語』は総24編の短編で構成された。このうち、荷風のアメリカ認識がもっとも集約的にあらわれた短編は「市俄古の二日」^{シカゴ}である。しかし筆者の管見によれば「市俄古の二日」は、先行研究において、作品にみられる文明観がごく概略的に指摘されているものの、作品の詳細はあまり研究されていない。本稿では、このような先行研究の状況に対する問題意識を踏まえて、「市俄古の二日」について文明批判という側面に焦点をあて、厳密に分析したい。

本稿ではまず、荷風がアメリカを「自由の国」として肯定的に捉えながら日本の封建道徳を批判していることを明らかにする。また荷風は、アメリカの機械文明を奇怪に感じると同時に、進歩の象徴として受け入れたことを明確にする。さらに、常に文学者への道を意識していた荷風にとって、アメリカ外遊のもつ意味についても考察したい。なお、荷風の封建道徳の批判と関連しては、そのような批判が当時の時代精神の性格をもっていたという意味で、明治期の作家、北村透谷と志賀直哉の作品との比較を、適宜、行うことにする。

本稿の底本としては、岩波書店1992年（平成4）7月版、『荷風全集』第4巻（以下、便宜上、新版『荷風全集』第4巻と呼ぶ）を用いるが、作品の分析に必要な場合、岩波書店1963年（昭和38）8月版、『荷風全集』第3巻（以下、便宜上、旧版『荷風全集』第3巻と呼ぶ）所収の「市俄古の二日」との比較を試みる⁷⁾。引用の際、

2) 蒲原有明「印象主義の傾向」、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 永井荷風』、有精堂、1980年、230頁。

3) 成瀬正勝『明治の時代』、講談社現代親書、1967年、265頁。

4) 相馬御風「最近の小説壇」、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 永井荷風』、有精堂、1980年、229頁。

5) 石内徹『荷風文学考』、クレス出版、1999年、165頁。

6) 網野義紘「永井荷風」、浅井清他編『新研究資料現代日本文学 第一巻 小説Ⅰ・戯曲』、明治書院、2000年、117頁。

新版『荷風全集』第4巻からの引用なのか旧版『荷風全集』第3巻からの引用なのかは本文中に明記することにする。また、本稿でのすべての引用において、旧漢字は常用漢字に改めた。

2. 「自由の国」としてのアメリカ

「市俄古の二日」は、Nという人物のシカゴでの二日間の滞在の記録という形式をとっている短篇である。「『市俄古の二日』は、1905年（明治38）3月16日から25日にいたるシカゴ見物から取材したもの」⁸⁾であるが、話は主人公であり、語り手でもあるNの視点を通して語られている。

「市俄古の二日」は、Nの友人でシカゴに住むジェームスの婚約者、ステラの自宅で

7) 「市俄古の二日」は最初、1905年（明治38）12月『文芸倶楽部』第11巻第16号の「雑録」欄に掲載された。後、1908年（明治41）8月博文館刊行の短篇集『あめりか物語』に収録されたが、この際、若干の修正が行われた。

本稿ではテキストとして、新版『荷風全集』第4巻所収の『あめりか物語』の中の「市俄古の二日」を用いるが、この全集での『あめりか物語』は、博文館刊行の短篇集『あめりか物語』と少し異なる。

新版『荷風全集』第4巻に収録された『あめりか物語』は、「短篇集『あめりか物語』から、フランス滞在中に材をとった『附録フランスより』の三篇を除いた諸作品を初版本シフト本の形で収録し、さらにアメリカ滞在中から生まれたにもかかわらず『あめりか物語』に収められなかった『舎路港の一夜』と『夜の霧』を〈余篇〉として加えた」ものである。（中島国彦「後記」、『荷風全集』第4巻、岩波書店、1992年、357頁）結局、新版『荷風全集』での『あめりか物語』は、1908年（明治41）8月時点での、荷風のアメリカ認識をもっとも正確に読み取ることができる編成になっていると言えるだろう。

ここで、一つ付け加えなければならないことがある。それは、今まで『荷風全集』は数回にわたって刊行されており、『あめりか物語』は、岩波書店の旧版『荷風全集』第3巻（1963年〈昭和38〉8月）と新版『荷風全集』第4巻（1992年〈平成4〉7月）以外にも、春陽堂・元版『荷風全集』第2巻（1919年〈大正8〉6月）、春陽堂・重版『荷風全集』第2巻（1926年〈昭和元〉9月）、中央公論社版『荷風全集』第3巻（1949年〈昭和24〉9月）に収録されていたということである。荷風は、すでに発表された自分の作品が新しく出版される時、しばしば手を入れた作家であり、『あめりか物語』もまた、全集によって、その表現に違うところがある。

本稿では、新版『荷風全集』第4巻の「市俄古の二日」に基づいて、あくまでも1908年（明治41）8月時点での荷風のアメリカ認識を詳しく分析することを目標とする。そして、旧版『荷風全集』第3巻による『アメリカ物語』はいまだに読まれており、研究者達によって長年言及されてきた事実を考慮に入れ、適宜、旧版『荷風全集』第3巻との比較も視野に入れておく。

旧版『荷風全集』第3巻での『あめりか物語』の編成は、中央公論社版『荷風全集』第3巻に拠り、「舎路港の一夜」と「夜の霧」とを「あめりか物語余篇」としておさめ、さらに、「夏の海」の初出本文を、「あめりか物語異文」として収録したものである。（稲垣達朗「後記」、『荷風全集』第3巻、岩波書店、1963年、634-635頁）。旧版『荷風全集』第3巻との比較を通して、新版『荷風全集』での「市俄古の二日」のもつ意味がいっそう明らかになると思う。

8) 成瀬正勝「解説」、『日本近代文学大系29 永井荷風集』、角川書店、1970年、22-23頁。

のエピソードを中心とした一日目と、シカゴ中心部での感想が述べられている二日目に大きく分けて考えることができる。一日目が、ジェームスとステラを囲む一家団欒の雰囲気主人公Nが幸福感を味わうことを通して、アメリカ賛美に結び付けられているのに対して、二日目はアメリカ文明批判の色彩が強い。本章では、一日目の「ステラの自宅でのエピソード」にみられるアメリカ認識をみておくことにする。

一日目のエピソードの登場人物は、ジェームス、ステラ、ステラの両親である。この四人への訪問客がNであり、Nはあくまでも客としてアメリカ家庭の生活ぶりとその雰囲気について述べている。

生活ぶりに関連しては、「室内の装飾は只淋しからぬばかりに長椅子、安楽椅子、
デスク すりもの ちゅうぶる ピアノ
 机、摺物の絵額、中古の洋琴などを置いた丈で、自分が想像した市俄古の生活としては、其の華美ならざるに驚いた」（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、202頁）とある。ステラの父が裁判所の判事として中産階級以上に属する人物であることを考えれば、そのアメリカ家庭の生活ぶりが予想以上に質素であることにNは驚いたことがわかる。ただし、アメリカの家庭生活の姿はこの作品に具体的にあらわれていない。Nの主な関心は、アメリカ家庭生活の詳細ではなく、アメリカという国がどういう国なのかに向けられている。Nはステラの家を通して、アメリカという国のイメージをつかむのである。

ジェームス、ステラ、ステラの両親という一日目の登場人物の中で、Nは主としてステラという女性の行動を通して、アメリカのイメージをつかんでいる。相思相愛のジェームスとの結婚が決まり、喜びに浸っているステラが高い声で笑う場面の印象をNは「少しも感情を抑へ
おとめ ハート
 ない此の国の少女の、香しい恋の心臓の響は、自分の耳にまで聞える様に思はれた」

（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、203頁）と語っている。ここで重要なのは、アメリカの「少女」は感情を抑えない、とNに理解されており、自分の感情に率直だということは美德とされているということである。「香しい恋の心臓の響」という表現にはそのような語り手の価値判断があらわれているのであろう。ところで、旧版『荷風全集』第3巻においては、上記引用の箇所「此の国の少女の、香しい恋の心臓の響」は「此の国の少女が胸の響」（「市俄古の二日」、旧版『荷風全集』第3巻、206頁）になっている。新版『荷風全集』第4巻のほうが、感情を抑えないアメリカの「少女」の態度をより肯定的に捉えていることがわかる。

上記引用の箇所において、語り手Nの価値判断は、ステラという一個人のキャラクターへの評価に止まっていない。アメリカという国自体が、女性が感情を抑えることなく素直に表現できる、見習うべき国だ、という評価を下していると解釈できる。実際に、この作品の中で、Nはアメリカを「自由の国」として礼賛している。と同時に、明治日本を人間本来の「自然な」感情を抑圧する国として批判している。次をみてみよう。

自分は心の底からステラの幸福を祈る切なる情に迫められると同時に、ああ、幸なるかな、自由の国に生れた人よ、と羨まざるを得なかつた。試に論語を手にする日本の学者をして論ぜしめたら如何であらう。彼女は、はしたないものであらう、色情狂者であらう、然し、自由の国には愛の福音より外には、人間自然の情に悖つた面倒な教義は存在して居ないのである。

(「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、203頁)

引用の箇所では、まず、ステラの幸福を祈る気持ちが述べられているが、それに続いて、ステラを「自由の国に生れた人」として把握し、話の焦点が「自由の国としてのアメリカ」にうつるといことが注目される。この作品でステラは、あくまでもアメリカのイメージと結びついて認識されている人物なのである。

この箇所は、アメリカという国のイメージだけを述べるだけではない。アメリカのイメージと明治日本のイメージが対立的なイメージとして把握されている。個人個人が率直な自分の感情に基づいて、愛を成就することができる「自由の国」であるアメリカと、人間の「自然な」感情を抑える国である日本という対立項目が、Nには設定されているのである。そして、明治日本が「〈自然な〉感情を抑える」ベースには儒教があるとNは考えているのである。勿論、論語を手にした学者というのは、儒学者だけを指す言葉ではない。Nは、多くの人々に儒教の教えが信奉され、個人の自由が尊重されず、また、自由な愛の成就など、まったく夢見ることもできなかつたと日本の現実を批判しているのである。

儒教を信奉する人々にとって、ステラの恋愛はまったく理解できず、彼らは人間自然の情に基づいて恋愛するステラを「色情狂者」と見なすだろうということがNの判断なのである。このような儒教に基づいた偏屈な考え方こそ克服しなければならないとNは考えているのである。

上記引用の箇所は、旧版『荷風全集』第3巻とその表現がほとんど差がない。その差は、ただ、新版『荷風全集』第4巻の「ああ、幸なるかな」という箇所の「ああ」という感嘆詞がぬけているということと、「色情狂者であらう、然し自由の国には」が「色情狂者であらう。然し自由の国には」になっているだけなのである。一見して、両テキストには、儒教批判という点において、あまり差がないようにみられる。しかし実際には、両テキストの間には相当な差が存在すると言わざるをえない。新版『荷風全集』第4巻の次の箇所が、旧版『荷風全集』第3巻にはまったくぬけているのである。

ああ、一日も早く吾等の故郷にも、此の様な愉快的な家庭の様を見る様にしたいものである。

試みに、自分が養育された家庭の様を回想せよ。四書五経で暖い人間自然の血を冷却された父親、女今川と婦女庭訓で手足を縛られた母親。音楽や笑声なぞの起こりやうはない。父は夜半過るまでも、友人と飲酒の快に耽り、終日の労苦に疲れた母親に向つて、酒の爛具合と料理の仕方を攻撃するのを例としたが、ああ、其の時の父の顔、癡悪な専制的な父の顔、唯だ諾々盲従して居る悲し気な、無気力な母親の顔、自分は小供

心ながら、世に父親ほど憎いものはないと思つたと同時に、母親程不幸なものも有るまいと信じた程である。然し、世は遂に進歩するものであるならば、此の野蛮な儒教時代も早晩過去の夢となり、吾等の新しい時代は遠からず凱歌の声を揚げるであらう。

（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、204-205頁）

旧版『荷風全集』第3巻の場合も、新版『荷風全集』第4巻の場合も、ステラの自宅でステラとジェームスが演奏をする場面があるが、その演奏を楽しむステラの家族の描写の中で、末尾の箇所にあたる新版『荷風全集』第4巻の「老判事までが椅子に坐りながら足拍子を打ち初めた」（旧版『荷風全集』第3巻では「老判事までが椅子に坐りながら足拍子を踏み始めた」）と「時計はやがて九時を打つた」（旧版『荷風全集』第3巻と同様）との間に、上記引用の長い一節が入っているのである。

この箇所を理解するためには、まず、荷風の父との対立を視野に入れる必要がある。文学の道を目指した永井荷風とその父永井久一郎との葛藤はよく知られている。荷風の外遊も、父には、息子荷風の商業界での立身出世を目標にするという意味合いをもっていたのに対して、荷風自身には、文学の見聞を広げるためのものであった。荷風の父にとっては、作家への道を歩もうとする荷風は理解できなかった。しかし、荷風にとっては父への抵抗はもっと根強いものであった。

荷風は、父から封建的で専制的な姿を読み取っていた。それは同時に、母への同情という性格をもっていた。この点は、荷風文学の見逃すことができない重要なポイントの一つである。

「市俄古の二日」は言うまでもなく、荷風自身の体験に基づいて書かれたものであるが、荷風を連想させる語り手Nは、封建的で専制的な父の倫理観のもとに儒教倫理があると考えている。Nの父は「四書五経で暖い人間自然の血を冷却された」人物であるが、要するにNは、儒教の教えが人間の自然な感情を抑圧するものであると述べているのである。

ここで重要なのは、Nが自分の養育体験を通して、克服しなければならない時代状況を読み取っているということである。Nは明治日本の状況が「野蛮な儒教時代」と把握する。「野蛮な儒教道徳」が、父親のような専制的な人間を生み出し、また、母親のように無気力に黙従する被害者を生み出したとNは考える。勿論このような構図は打破しなければならない。そして、この野蛮な状況は長く続かない。「野蛮な儒教時代」は「吾等の新しい時代」に変わっていくだろうというのがNの考えである。このような時代認識は、荷風特有のものではない。それはある種、明治の多くの作家の共通認識であったように思われる。

例えば、「市俄古の二日」にみられる「野蛮な儒教時代」対「吾等の新しい時代」という時代区分は、北村透谷の「内部生命論」を連想させる。北村透谷は「内部生命

論」の中で、当時の思想界を生命思想と不生命思想が対立するものとして把握し、生命思想と不生命思想の対立を、東西思想の対立として認識していた。透谷は、「東西二大文明の要素は、生命を教ふるの宗教あると、生命を教ふる宗教なきとの差異あるのみ」⁹⁾と述べる。透谷の言う「生命を教ふるの宗教」は、キリスト教を指すのであり、したがって、東洋の諸宗教が、生命観念からみると批判されることになる。儒教も例外ではない。次をみてみよう。

徳川氏の時代にあつて、最も人間の生命に近かりしものは儒教道徳なりしこと、何人も之を疑はざるべし。然れども儒教道徳は実際の道徳にして、未だ以て全く人間の生命を教へ尽したるものとは言ふべからず。繁雑なる礼法を設け、種々なる儀式を備ふるも、到底Formalityに陥るを免かれざりしなり、到底貴族的に流るるを免かれざりしなり、之を要するに其の教ふる処が、人間の根本の生命の絃に触れざりければなり。¹⁰⁾

透谷は鋭く徳川時代の日本の代表的な宗教思想とも言える儒教思想を攻撃する。儒教思想が掲げる理想はどうであれ、実際においてはただ形式にこだわり、人間の自然な感情を抑えるだけであったということである。事実上、儒教というものは人間の生命力を抑圧する思想だということである。

透谷の「内部生命論」は、1893年（明治26）5月、『文学界』第5号に発表された。本稿の中で、テキストとして取り上げている新版『荷風全集』第4巻所収の「市俄古の二日」が、1908年（明治41）8月博文館発行の『あめりか物語』の「市俄古の二日」に基づいたものなので、時間的に言って透谷の「内部生命論」というテキストと、荷風の「市俄古の二日」というテキストとは15年ぐらいの隔たりがある。しかし、その時間的な差が存在するにもかかわらず、両テキストの間には、その時代状況を把握する点において一脈通じるところがある。

透谷の言う「不生命思想」とは、仏教とか儒教とかという特定の宗教思想を指すのではなく、日本に長く存在してきた「人間自然の生命力を抑圧する宗教・思想」を指しており、荷風が「市俄古の二日」の中で、儒教思想を攻撃する趣旨は、儒教が「人間の生命力を抑圧する」という点に終始その焦点がおかれている。透谷と荷風の論点のポイントは基本的に一致するものである。

もともと、透谷の「生命思想」というのが、キリスト教の生命観念そのものではないことは指摘しなければならない。難解極まりない透谷の「生命思想」をキリスト教との関連の上でだけ論じることはできない。また、荷風が儒教倫理を攻撃する際、その代案としてキリスト教

9) 北村透谷「内部生命論」、『現代日本文学全集4 北村透谷・樋口一葉集』、筑摩書房、1954年、134頁。

10) 北村透谷「内部生命論」、135頁。

倫理を提示するわけではないということも指摘しなければならない。そして、透谷と荷風という二人の文学者が新しい時代の倫理・思想として、同じ代案を提示しているわけでもない。にもかかわらず、二人の時代批判の精神は、通底するところがあるのである。

ここで、「市俄古の二日」の理解のため、もう一人比較の対象として取り上げたい作家がいる。それは志賀直哉である。志賀直哉の場合も、荷風同様、その文学のベースには父との対立が存在していた。父との葛藤の中身は、荷風と相通じるところがあった。志賀直哉の父直温も、直哉に実業家として成功を収めることを期待し、直哉が文学の道を歩もうとすることにまったく理解を示さなかった。直哉と父との葛藤にも、明治1世代と明治2世代との価値観の対立があった。

志賀直哉は、多くの自伝的な作品を書き残しており、直哉の父との葛藤が描かれている小説もいくつか存在する。中でも、その葛藤の中身が世代間の価値観の相違として、あらわれている小説として『大津順吉』をあげることができる。直哉と父との価値観の相違の中身については、父との和解の顛末を作品化した『和解』（1917年〈大正6〉10月）においても不明瞭である。『大津順吉』は1912年（大正元）9月『中央公論』に発表された。『あめりか物語』が博文館から刊行されたのが、1908年（明治41）8月であったので、『大津順吉』と「市俄古の二日」は時期的にあまり差はない。ここで、両作品における世代間の葛藤、その価値観の類似性について少し考えてみよう。

『大津順吉』は、順吉の関心の対象がKWから千代へとうつっていく話として把握できる。話の前半部は、主人公順吉が主として関心を寄せる女性としてKWが登場している。前半部においては、文学の道を歩もうとする順吉と、それが理解できない順吉の父との葛藤が描かれている。

後半部には、その関心の対象になる女性として千代が登場している。結局、順吉は千代との結婚を決心するにまで至る。その際、結婚に反対する父親が順吉をどのように評価していたかがみられる箇所がある。それは、順吉の父が順吉を「痴情に狂つた猪武者」¹¹⁾と呼んでいることを、順吉が叔父から聞く場面である。

ここで、「市俄古の二日」におけるステラという女性に対する評価の箇所をもう一度みてみよう。それはすでに引用した「試に論語を手にする日本の学者をして論ぜしめたら如何であらう。彼女は、はしたないものであらう、色情狂者であらう」（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、203頁）という箇所である。この箇所を順吉の父を「論語を手にする日本の学者」として考え、また、「痴情に狂つた猪武者」を「色情狂者」として考えるならば、ぴったりその対応関係が成立するということに気付くであろう。

勿論、順吉の父は儒学者ではない。しかし、順吉の父が陳腐な儒教道徳にこだわっているということは言えるだろう。順吉の父は、「論語を手にする日本の学者」がステラの恋

11) 『大津順吉』、『志賀直哉全集』第2巻、岩波書店、1973年、313頁。

愛がまったく理解できず、「色情狂者」と見なすのと同様、順吉なりの「恋愛」がまったく理解できず、順吉を痴情に狂ったと見なしているからである。順吉の父は、Nの父のように「四書五経で暖い人間自然の血を冷却された」（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、204頁）人物であると言えるだろう。順吉は、自分の父を儒教の観念によって冷たくなった人間だとは一言も言っていない。しかし、順吉の父にとっても、Nの父にとっても、少なくともその息子の世代の「人間の自然な感情に基づいた行動」と「恋愛」は、まったく理解できなかったにちがいない。この点、『大津順吉』と「市俄古の二日」は、明治2世代による明治1世代への批判の書としても読めるものなのである。

明治期の北村透谷、永井荷風、そして志賀直哉という文学者達はそれぞれ個性が異なり、その文学観も異なる。しかし、彼らはそれぞれの観点から明治期に何をすべきか、または何が克服されなければならないかという点において、ある種の共通認識をもっていた。それは、人間自然の感情を抑圧する時代風潮を克服しなければならないという認識であった。そのような点が3者の比較を通して、当時の日本の文学者達に認識されていたことが確認できる。

3. アメリカ文明への批判

今まで、「市俄古の二日」を中心に、アメリカが「自由の国」として把握されていることを考察してきた。「自由の国」としてアメリカは見習うべき国として礼賛され、これだけだと、まるで「市俄古の二日」は「アメリカ礼賛の記」のようにみられるが、実はこの作品にはもう一つの側面がある。それは、アメリカへの批判という側面である。アメリカ批判は、二つの側面から行われている。一つは、アメリカの巨大な機械文明の奇怪さという側面であり、もう一つの側面は、アメリカは文学の国ではないという観点なのである。まず、「巨大な機械文明の国」としてのアメリカについて考察してみよう。

「市俄古の二日」の二日目、その巨大な機械文明への批判の中心になる。一日目、ステラの自宅で晩餐会を共にし、幸福感を味わったNは、二日目シカゴ中心部の町に接し、一日目とはまったく別の感じを味わう。次の箇所をみてみよう。

丁度、あらゆる種類のシカゴ人が下町の会社や商店へ出勤の時間なので、車中には殆ど空椅子もない程、男や女が乗り込んで居る。彼等は何れも鋭い眼で、最短時間の中に、最多の事件の要領を知らうと云ふ非常な恐しい眼で、新聞を読みあさつて居る。（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、208頁）

ここで、Nが批判しようとするものが何かは明らかであろう。Nは、アメリカを動かしている「最短時間の努力で、最多の成果をあげる」という経済原則に批判の目を向けているのである。Nには、そのような立場をとるシカゴの人々の行動が奇怪にうつったにちがいない。彼らはNによれば、「鋭い眼」、また「恐しい眼」をしている。彼らは、Nの観点からみれば、「自然な眼」をした人々ではない。「アメリカ文明」というのは、経済の能率を重んじるあまり、人々の自然さをなくしたと、Nは感じたにちがいない。

上記引用の箇所を旧版『荷風全集』第3巻と比較してみよう。上記新版『荷風全集』第4巻と旧版『荷風全集』第3巻との間には少し差がある。上記引用の第一文の「車中には殆ど空椅子もない程」が旧版『荷風全集』第3巻には「車中には席もない程」になっており、第二文が「彼等は何れも最短時間の中に最多の事件の要領を知らうと云ふ恐しい眼付で新聞を読みあさつて居る」（旧版『荷風全集』第3巻、211頁）になっている。新版『荷風全集』第4巻のほうが、旧版『荷風全集』第3巻に比べて、「鋭い眼」、「非常な恐しい眼」という表現を用いることによって、アメリカ文明への批判のトーンが高まっている。

もともと、荷風が批判している経済原則は、アメリカ社会だけに適用される原則ではない。大なり小なり、近代化を目指したすべての社会に共通する原則なのである。このようなことを考慮に入れば、荷風はただ単にアメリカを批判しているのではなく、もっと根源的なところの、「能率を大事にする近代社会のメカニズム」に批判的だったとも考えられるのである。

そのような近代社会への批判から、橋を渡って出勤する人々の姿が「今しも石橋を渡り尽した無数の男女の姿は吞れる如くに、見る見る闇の中——市俄古なる闇の中に見えずなつて了ふのであつた」（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、209頁）と語られている。「市俄古なる近代都市」そのものが「闇の中」として象徴的に表現されているのである。この表現は旧版『荷風全集』第3巻においても、ほとんど一致している。

次に、アメリカの「機械文明批判」と関連して、指摘したい箇所がある。次をみてみよう。

『Great City!』と自分に質問するらしく云掛けたので、

『Yes, Big monster.』自分は答へた ——何と形容しやうか、矢張人々の能く云ふ通り怪物とより外に云ひ方は有るまい。

（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、209-210頁）

ジェームスとNが、シカゴの市街地を眺めながら対話する場面である。ジェームスがシカゴを「Great City」と感じているのに対して、Nは「Big monster」だと考えていることがあらわれている。この箇所は、旧版『荷風全集』で『Great City!』は「Great City」

になっており、『Yes. Big monster.』は「Ah! monster.」になっている。新版『荷風全集』第4巻のほうが旧版『荷風全集』第3巻に比べ、アメリカ批判の程度が強いことが確認できる。

この箇所では、「Big monster」という言葉と「怪物」という言葉に注目できる。両方とも巨大文明の「奇怪さ」を表している。この「奇怪さ」という言葉の反義語として考えられるのは「自然」という言葉であろう。すでに指摘したように、「自由の国」としてアメリカを賛美する時、アメリカは「人間の自然な感情を自由に表現できる国」として賛美されていた。語り手Nは、あくまでも「自然」という重要な尺度をもって、アメリカ社会を礼賛していた。

それが、上記引用の箇所では「自然」というキーワードをもって、アメリカ社会を批判していることが把握できる。Nによれば、「アメリカ社会」は「自然の法則」とは別の方向に向けて進んでいく社会であり、それは「奇怪な」社会であるために、批判されるべきであるということになるであろう。荷風は、同じ「自然」というキーワードを用いて、一方においてはアメリカを賛美し、もう一方においてはアメリカを批判しているのである。このようなことから荷風のアメリカへの評価は、盲信的なアメリカ追従の性格をもっていないことが窺える。

荷風がアメリカを、ひいては西洋を礼賛する時には、一つの基準があった。それは「人間の自然な感情を表現できる思想」の伝統があるということであった。荷風はその基準に基づいて、アメリカを賛美した。

荷風の作品の中に、西洋社会に対する次のようなコメントがある。

自分の西洋崇拜は眼に見える市街の繁華とか工場の壮大とか、凡て物質文明の状態からではない、個人の胸底に流れて居る根本の思想に対してである。¹²⁾

『帰朝者の日記』からの引用である。『帰朝者の日記』は1909年（明治42）10月『中央公論』〈秋期大附録号〉に発表された。博文館発行の『あめりか物語』とわずか1年のタイムがあるだけである。

引用の「個人の胸底に流れて居る根本の思想」というのはどういうものであろうか。簡単には言えない。しかし荷風が、西洋の個人を尊重する文化の伝統を西洋外遊を通して評価できるようになったことは容易に把握できる。荷風にとって西洋と言うのは、偉大なる思想の伝統によって評価されていた。

荷風は西洋を礼賛する時、思想の部分は評価しながらも、物質文明の部分は評価していない。しかし荷風にとっては、明確な基準があった。それは「自然さ」であった。人間の「自然さ」を尊重する西洋思想は礼賛した。しかし、人間の「自然さ」を抑圧するシステ

12) 『帰朝者の日記』、『荷風全集』第6巻、岩波書店、1992年、165頁。

ムとしての西洋の物質文明は、鋭く批判したのである。

ただし、「市俄古の二日」の場合、西洋の物質文明に対して必ずしも批判的ではないということは言える。シカゴの高層ビルの最上階に登り、このような高層ビルを建てることのできた人間の能力に驚嘆した語り手 N は、「少時前文明を罵つた自分は、忽ち偉大なる人類発達の光榮に得意たらざるを得なくなつた」（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、210-211頁）と述べてもいるからである。しかしこの箇所を、N は西洋の物質文明を肯定するようになった、と解釈することはできない。N は高層ビルを人類進歩のシンボルとして考えただけなのである。「自然さ」を重んじるスタンス自体が変わったわけではない。

今まで、アメリカの物質文明への批判について考察してみたが、この作品にはもう一つ、アメリカへの批判のポイントがある。それはアメリカ文学への N の評価である。この小説には、N が自分の文学者としての意識をあらわにする箇所がある。二日目の下宿屋では、次のようなアメリカ文学の話がでている。

自分が知つて居るアメリカの作家と云へば、ブレットハート、マークトイン、ヘンリー
ニューヨーク
 ゼームス、高々此れ位のもので有らう。去年の暮であつたか、紐育の友から其の頃文壇を風靡して居る二三の大家の作を送付されて、而も皆半分ほどまで読んで止して了つた事がある。猶ほ折々は雑誌など開いて見るけれども、何故か此の新大陸の作家中には、ドーデ、ツルゲネフの様な優しい面影を見出す事が出来ない。大方アメリカ人にはああ云ふ空想の多い綺麗な作物は、その趣味に適して居らぬのであらうか。
 （「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、207頁）

この箇所には文学観という観点からアメリカ評価が明らかな形で表れている。アメリカは文学的な伝統がない国であると批判されているのである。「文学の文学たる所以」は、文学の想像力にあるのであるが、アメリカ文学にはそれが乏しいということである。文学は実際に発生した事実から成り立つ「歴史」ではなく、あくまでも作り上げられた「フィクション」であるというのがここでの文学論の主眼である。N はフランス文学やロシア文学にみられる想像力がアメリカの文学には欠けていると思う。そのため、アメリカ文学は評価できない。このようなことを述べているのである。

上記引用の箇所は、旧版『荷風全集』第3巻との間に差異がある。若干の表現の差を除けば、もっとも大きな差は新版『荷風全集』第4巻の「ああ云ふ空想の多い綺麗な作物」が旧版『荷風全集』第3巻には、「かかる哀愁の深い作物」（「市俄古の二日」、旧版『荷風全集』第3巻、210頁）になっているということである。

この旧版『荷風全集』第3巻では、すぐれた文学を評価する基準が新版『荷風全集』第4巻の基準と異なっている。旧版『荷風全集』第3巻には、文学作品は人生の苦

悩を捉えることにその本質があるという文学観があらわれているのである。その基準をアメリカ文学のほうに照らし合わせた時、アメリカ文学はその深みに欠けているという評価である。

ただし、新版『荷風全集』第4巻にみられる文学観と旧版『荷風全集』第3巻にみられる文学観は矛盾するものではない。両方の基準はそれぞれ、文学の本質を別の側面から捉えたものである。いずれにせよ、両テキストにおいて、荷風がアメリカ文学をどのような基準からみても評価できないと考えたことが確認できる。

主人公Nにとって、シカゴへの旅は一種の文学散歩でもあったように思われる。汽車でカラマズー市からシカゴに向かう途中の汽車の外の景色は、「露西亞小説中の叙景を想起こす様な景色を幾度も目にして過ぎた」（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、198頁）と述べられている。Nは常に「自分は文学を目指して邁進する」という気持ちをもっており、そのため景色一つ一つも文学作品と関連させ、見ていたことがわかる。

「文学を目指して邁進する」というNの気持ちは、作品の最後のほうからも窺える。「市俄古の二日」の最後の文は「ジェームスは会社へ出勤すると、共にエレベーターアベニューで下に降り、商店の戸口で別れた。自分は此れから、ミシガン大通の美術館へ見物に行くのである」（「市俄古の二日」、新版『荷風全集』第4巻、211頁）と締めくくられている。ここでは、ジェームスとNの向かって行く道はまったく別の道であるということが示されている。ジェームスの向かって行く道は、「Great City」の経済システムへの参加の道である。しかし、巨大なアメリカ文明から「奇怪さ」を読み取っているNはその道には参加できない。Nは人間の「自然な」想像力の産物である文学に向かって行く文学者、ひいては芸術家なのである。ここには、文学または芸術への道は、ある種の孤独を伴うものであり、「奇怪さ」に満ちた文明について行くことはできない、というNの文学者としての意識があらわれている。

4. 結び

以上、永井荷風の『あめりか物語』について「市俄古の二日」を中心に考察した。この短篇をただ単に、シカゴ滞在の荷風の経験だけがあらわれたものとして読むことはできない。この作品がはらんでいる問題意識はもっと奥深いところにある。「アメリカ社会への冷静な批評の記」として読めるのである。

この作品でアメリカはまず、「自由の国」として捉えられている。「自由の国」というのは、人間の「自然な」感情が自由に表現できる国だという意味であり、この観点から当時の日本は人間の「自然な」感情を抑圧されており、この点を克服しなければならないという

時代認識も提示されている。このように日本の封建的な現実を批判するという荷風のスタンスは、北村透谷・志賀直哉のテキストとも通底すると考えられる。

しかし、この作品は決して「アメリカ礼賛の記」ではない。アメリカの巨大文明は「奇怪さ」に満ちており、そのため、人間の「自然さ」を抑圧していると主人公 N は考える。その文明を鋭く批判する立場がみられるのである。またアメリカ文学は、深みに欠けていると批判されている。

この作品は「文明批判の記」であると同時に、荷風の文学者としての意識があらわれた小説でもある。「奇怪な」巨大文明には参加できない、「自然な」人間の想像力の産物である文学への道こそ目指す価値がある、という荷風の作家意識があらわれた小説なのである。

【参考文献】

- 網野義紘「永井荷風」、浅井清他編『新研究資料現代日本文学 第一巻 小説・戯曲』、明治書院、2000年
- 石内徹『荷風文学考』、クレス出版、1999年
- 稲垣達朗「後記」、『荷風全集』第3巻、岩波書店、1963年
- 蒲原有明、「印象主義の傾向」、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 永井荷風』、有精堂、1980年
- 北村透谷「内部生命論」、『現代日本文学全集4 北村透谷・樋口一葉集』、筑摩書房、1954年
- 志賀直哉『大津順吉』、『志賀直哉全集』第2巻、岩波書店、1973年
- 相馬御風「最近の小説壇」、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 永井荷風』、有精堂、1980年
- 中島国彦「後記」、『荷風全集』第4巻、岩波書店、1992年
- 中村光夫『《評論》永井荷風』、筑摩書房、1979年
- 永井荷風『あめりか物語』、『荷風全集』第3巻、岩波書店、1963年
- _____『あめりか物語』、『荷風全集』第4巻、岩波書店、1992年
- _____『帰朝者の日記』、『荷風全集』第6巻、岩波書店、1992年
- 成瀬正勝『明治の時代』、講談社現代親書、1967年
- _____「解説」、『日本近代文学大系29 永井荷風集』、角川書店、1970年

要 旨

永井荷風は明治期に西洋外遊の体験をもった作家の一人である。周知の通り、荷風は自分のアメリカとフランスでの体験に基づいた作品集『あめりか物語』（1908年〈明治41〉8月）と『ふらんす物語』（1909年〈明治42〉3月）を出版した。両作品からは、荷風の西洋文明観を読み取ることができる。

本稿では、この中で『あめりか物語』の「市俄古の二日」を中心に、荷風のアメリカ認識について考察した。この作品のもつ「アメリカ社会への冷静な批評の記」としての性格を分析した。

この作品でアメリカは、まず、「自由の国」として捉えられている。「自由の国」というのは、人間の「自然な」感情が自由に表現できる国だという意味である。この観点から、当時の日本は人間の「自然な」感情を抑圧されており、これは克服されなければならないという時代認識が提示されている。このように日本の封建的な現実を批判するという荷風のスタンスは、北村透谷・志賀直哉のテキストとも通底すると考えられる。

しかし、この作品は決して「アメリカ礼賛の記」ではない。アメリカの巨大文明は「奇怪さ」に満ちており、そのため、人間の「自然さ」を抑圧していると主人公Nは考える。その文明を鋭く批判する立場がみられるのである。またアメリカ文学は、深みに欠けていると批判されている。

この作品は「文明批判の記」であると同時に、荷風の文学者としての意識があらわれた小説でもある。「奇怪な」巨大文明には参加できない、「自然な」人間の想像力の産物である文学への道こそ目指す価値がある、という荷風の作家意識があらわれた小説なのである。

キーワード：アメリカ、自由の国、自然な感情、北村透谷、志賀直哉、巨大文明、
文明批判、文学への道

투 고 : 2008. 5. 31

1차 심사 : 2008. 6. 14

2차 심사 : 2008. 6. 28

住 所 : (446-943) 경기도 용인시 기흥구 언남동490 신일아파트 106-702

電 話 : 010-3310-5545

e-mail : kgsiga321@hanmail.net